

(1999年秋号) 夏をしのぐ

ほんとに暑い夏だった。冷房の利いた職場に勤めていた人にとってはさほどでは無かったのかもしれないが、札幌の普通の家庭にあるのはせいぜい扇風機。室内は戸外に比べて、少なくとも五度くらいは高くなるのだから、いくら扇風機を廻しても、ただ高温の空気をかきまわしているだけのこと。暑さは並みではなかった。「車庫に入って、車のクーラーをいれて昼寝をするのが一番だった」と知人が云った。なるほどなと思いながら、何人かに今年の銷夏法を尋ねてみると、

「デパートやスーパーで一日過ごした」

「銀行の窓口が一番涼しい」

「時間つぶしは、やはり映画館。無料のギャラリーめぐりも」

とチープな答えが返ってきた。タクシーの運転手は「非番よりも、車に乗っているほうがずっと涼しい」といい、何度か海水浴場へ客を運んだが平日でもあきれるほどの混みよう。「ヒマな若い人がこんなに多いのはどうしてだろう。中年が働いて若者が遊ぶ時代なんですかね」とグチを言っていた。

なるほど、泳ぐという銷夏法だけは昔からあった。クーラーどころか扇風機もなかった時代、泳ぐか行水を浴びるか、家の周囲に打水でもするか、が暑さをしのぐ精一杯の手だてだった。

昭和三十年代くらいまで、札幌市民の海水浴場の中心は銭函海岸。駅を降りて街なかをしばらく札幌方向に歩くと砂浜、小樽方向は石浜だった。海水浴用の特別列車が出るほどのにぎわいもあった。マイカーなど全く無かった頃のことだ。

銭函駅は、あきれるほどツバメが多く巣を作っていて、駅前広場を飛び交い、待合室へ出入りしていた。銭函の海は清澄とはちょっと云い難かった。海へ入ると、何かの海藻の死骸なのだろうか、海綿の巨大なロールのようなものが横たわっていてそれを踏み越えなければ泳ぐ深さのところまで行けなかった。

泳ぎ疲れて駅へ戻る道は遠かった。日暮近く一層せわしなく飛びまわるツバメを見ながら汽車を待つ。そして超満員の列車にへとへとになった体を押し込むのだった。

だが海水浴は本当に銷夏に役立ったのだろうか。焼け過ぎた肌のほてりで、その夜は並み以上に暑苦しかった。

それにしても、自動車賃を使って海水浴に行くのはかなり贅沢な遊び。夏休中に一度でも親に連れて行ってもらえるのは中流以上の家庭の子だけだった。僕の育った所は山鼻小学校の校下だったから、水のある遊び場で最も近い場所は中島公園、少し遠出して豊平川のあたり。中島公園では、鴨々川から池へ流れ入る小川が格好の場所だった。川底は玉石で、深さはヒザぐらい。苔ですべてころんでも安全だった。パンツードになり、日本手拭いを網がわりにして夢中でメダカをすくう毎日だった。メダカだけでなく、水スマシもいたしゲンゴロウもいた。石をめくるとゴタッペと呼んでいた小魚もいた。紫外線が健康に良くないなんて誰も云わなかったし誰の知らなかった。夏休みが終わると、黒んぼ大会なんてのがあって、一番日焼けをした子が賞をもらったりしたものだった。

豊平川へ子供だけで出掛けるのには冒険心が必要だった。この川はけっこう瀬や淵があって流れが急だ。毎夏ここで水死する子供が何人かいたから、「豊平川へ行く」といえば親に足止めを喰う。だから一層、親にかくれて行きたくなる。豊平川の中でも、中の島側の精進川の落ち口のあたりは、大人の背も立たぬ深い淵で、水面と底では流れの早さが違い、上流から入ると水に吞まれたまま一気に淵の下の端まで流される。泡立つ水の下を、もがきながら下る数秒がたまらなく面白かった。思い返してみると危険この上ない遊びだったし、現に中学一年生の時、同級生が一人ここで溺死している。

安全といえば中島公園にあったプールは最も安全だった。このプールは何度かの改装のあと、平成八年に解体されてしまったが、かつては北海道の水泳のメッカと呼ばれてもいた。場所は伊夜日子神社の裏手と云えば分かりやすいだろうか。解体以前の十年ほどは高い塀でまわりを囲い、通りすがりの人からは姿をかくしていたから、そこにプールがある事すら知らぬ人が多かった。

本来ここは製氷場だったのだそう。それを大正十二年から夏場だけプールとして利用できるようにしたのだという。大きさは百四十?b x 二十三?b。面積としては当時日本一の大プールと称していたのだとか。

僕が覚えているプールは終戦前後。別に入場料を取るわけでもなく、見張りがいるわけでもなく、脱衣場もなかった。北側五十?bが競技用で、スタート台と、水面に突堤のように出張ったターニング台があった。南側およそ百?b弱の部分はやや浅く、ここが遊び場でもあり、年に一度、学校の水泳授業が行われる場所にもなった。たぶん市内の小学校の間で使用日の打合わせでもして、上級生を連れて行ったのだろう。

このプールの水は、鴨々川からとっていた。取入口は、護国神社の境内に接している現在の子供の水遊び場のあたり。下水の流入口のような場所から、地下を通過してプールに入っていた。別に消毒をしている様子もなく、川の水そのままだったから雨の後などはプールの水も濁ってしまった。衛生的とはとても云えないが誰も気にしていなかった。そういえば、終戦の前後の小中学生には、トラホームと呼ばれていた眼病が流行っていて、充血した眼や、目やにをためた子が多かったが、案外原因はこのあたりにあったのかもしれない。

大正十二年から始まった中島プールは、昭和四年に側面を改装してコンクリート壁としたと記録にある。その後何度か改修がくり返されたが河水から水道水になったのは昭和四十年から。

占領軍が札幌にやってきてすぐに中島公園のかんりの部分が接收され有刺鉄線が張りめぐらされた。プールもその中に入っていた。やがて占領軍は真駒内に移駐したが、そこから流れ出る汚水が豊平川へ直接流入したため、川での游泳は全面禁止。でも戻って来たプールは使用禁止になったのかどうか、同じ川の水を利用していたのだから汚れは同じ筈なのだが。二十五、六年頃にはじゃぶじゃぶ泳いだ覚えがある。

ともあれ、かつての銷夏法は素朴そのもの、泳ぐか水を浴びるかだった。当然、冷房病なんてのは有りようはずもなかった。

が、秋が深まってくると、今年のあのあきれるような暑さがなつかしくもなる。